

広場

毎日俳壇

井上 康明選

片山由美子選

小川 軽舟選

西村 和子選

まだ名前なき妹と良夜かな

小田原市 林 梢

△評▽幼い作者は生まれたばかりの妹と、中秋の名月の夜を過ごしている。まだおぼつかない妹の命は、月明かりに包まれている。持ち古りし夫婦の簪や走り蕎麦

東京 福島 照子

吐く種の無くて淋しき葡萄かな

武蔵野市 渡辺 一甫

△評▽昔はブドウを食べるときに種がなければいいのにと思ったものだが、なければないで物足りないというのが人間心理である。やや寒や入院前に髪染めに

臼杵市 村上 玲子

格闘のリングの下やちろ鳴く

四條畷市 中尾 謙三

△評▽地方巡業のプロレスだろう。薄闇に鳴くコオロギの声に気づくと、うわべは派手な興行ももの悲しさを帯びる。ボタ山も炭坑もなくすだく虫

中間市 石田 常夫

一献は一句もたらす新走り

西東京市 岡崎 実

△評▽「新走り」は新酒のこと。「いっこん」「いっく」の音韻の畳みかけが効果的。きつと切れのいい辛口の酒だろう。秋の暮一戸灯ればまた一戸

茅ヶ崎市 古田 哲弥

△評▽夫婦の簪は歳月をともにした絆のしるし。晩秋を迎え、走りそばに新鮮な味わい。富士の初雪故郷はそのあたり

狭山市 小俣 敦美

打ち寄せることのそれぞれ秋の潮

明石市 小田 慶喜

赤いカンナに線状降水帯の雨

羽曳野市 鎌田 武

啄木の山に初雪ふりて止む

高松市 島田 章平

梨を剥く昼の休みはモーツァルト

尾張旭市 小野 薫

甲斐駒は男と思ふ秋夕焼

東京 福島 隆史

農婦らの白粉厚き芝居

湖西市 宮司 孝男

蛇笏忌の山に白雲遊びをり

久留米市 持地 恒美

△評▽伸びてきた髪を染め、気分も引き立てようということだろう。「やや寒」に心細さが漂う。青北風や軒に吊りたる物の音

加古川市 中村 立身

稲穂波鎮守の森を囲みけり

小林市 黒木 暢

長き夜や日記につづること多く

寝屋川市 多田 泰子

赤まんま存分に泣くあかんぼう

平塚市 日下 光代

椿の実いつ拾ひしや筆入れに

東京 山口 照男

鬼の子の少し貌出す仮寓かな

鹿児島市 岡村梨枝子

秀才のあんがい速き運動会

東久留米市 矢作 輝

泣き止まぬ児を負ひて出る後の月

東京 福島 照子

△評▽炭都のおもかげが表向きは消え去っても、その記憶は土地に染みついているようだ。名月や団子坂から狸坂

東久留米市 矢作 輝

蝸や鏡の湖に朝を告げ

大津市 横川 和釀

秋の背外階段で眠る猫

松戸市 森 美奈子

振り向けば四面楚歌なる世かな

兵庫 小林 怨水

投げ釣りの竿の撓りや鱗雲

和歌山 馬谷富貴子

窓越の雨月眺めて独り酒

宮崎市 齋藤 豊

初しぐれ木地師は木屑焚きくれし

奈良市 梅本 幸子

校庭の子らの遊びの秋めけり

土浦市 今泉 準一

△評▽秋の目が見る間に暮れてゆく様子を、家々の灯を描いて表現した。写生の目が確か。遠くまで旅する鯨星月夜

岸和田市 妙中 正

一本は離れ白花彼岸花

新居浜市 今井 忍

箸置いて何かつぶやく生身魂

和歌山 手押 鷹翔

振り向けば子の姿なき世原

相模原市 はやし 央

吟行の寺にもらひしくわりんの実

奈良市 伊東 勝

透いて見ゆるみな頼りなげ秋簾

東京 石川 黎

洛北の流れまはゆき新豆腐

東大阪市 三村まさる

少女らはボルカを踊る月今宵

大阪市 工原千賀子

うたは奏でる

聴覚で感じる秋 染野太朗

秋の歌を探していたら、次のような歌が目にとまった。いずれも秋を聴覚で感じ取っている。

・柿の実の熟れ落ちし地向きあへる一枚の空ひびきたるなり 横山未来子  
柿の実の落ちたときの音が響いているのか。あるいは例えば、柿が潰れたのを悲しむように、空自体が鳴っていると感じられたのか。平面としてとらえられた空がやけに広い。秋空の高さが、地と空のあいだを響く音そのものとして感知されてもいる。

・子と我と「り」の字に眠る秋の夜のりりりりりりあれは蟋蟀 俵万智  
眠る2人の様子をます「り」の字で視覚的にとらえる。それがそのまま一首のなかで「り」の音に変換される。その音はコオロギの鳴き声だという。視覚と聴覚が歌を介していつのまにか混じり合っている。「あれは」と言って耳を澄ます様子や、美しい音に包まれて秋の夜を眠る2人が、はつきりと見えてくる。

・秋天にきんこんかんこん鐘が鳴るきんもくせい香の鐘が鳴る 小島ゆかり  
金木犀の香りがもはや音そのものになっている。秋の深まりを告げる音、また、その香りに気分が華やいたということを比喩的に表す音でもあろう。金木犀の色は鐘の色を連想させる。この秋空もやはり広くて高い。嗅覚と視覚が聴覚に引き寄せられたような歌だ。

長く厳しい夏が過ぎ、やっとのことで迎えた秋だ。とても短い季節だけれど、聴覚に限らず、五感のすべてを豊かに使って、少しでも楽しみたい。  
(そのの・たろう)歌人